

組織論で読み解く 江戸時代(5)

遠田, 雄志 / OGAWA, Itaru / ENTA, Yushi / 小川, 格

(出版者 / Publisher)

法政大学経営学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei journal of business / 経営志林

(巻 / Volume)

47

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

89

(終了ページ / End Page)

99

(発行年 / Year)

2011-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009545>

〔研究ノート〕

組織論で読み解く

江戸時代 (5)

遠田雄志 / 小川 格*

目次

はじめに

I. 組織としての江戸時代

1. 組織の常識

1.1 鎖国

1.2 米本位制

1.3 参勤交代

1.4 世襲と身分制度 (以上第46巻4号)

2. 成長ゆえの衰退

2.1 武士が武器を独占した社会

2.2 家康を支えた譜代家臣団

2.3 徳川幕府の金、物、人

2.4 譜代筆頭井伊家の誇りと挫折
(以上第47巻1号)

3. 変化の気づきと互解

3.1 海外事情

3.2 田沼意次

3.3 蘭学者たち (以上第47巻2号)

4. 常識の更新

4.1 尊皇攘夷

4.2 志士という名のアジテーター

4.3 適塾と蘭学の行方

4.4 幕末そして維新のあけぼの
(以上47巻3号)

II. 江戸時代の春夏秋冬

1. 春

1.1 最後の戦争

1.2 改易と浪人の激増 (以上本号)

1.3 東福門院和子

1.4 島原の乱

1.5 寛永文化

2. 夏

3. 秋

4. 冬

III. 江戸時代の意味するもの

おわりに

II. 江戸時代の春夏秋冬

1600年の関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、1603年征夷大將軍の宣下をうけ、江戸に幕府を開いた。そして、家康の後を継いだ秀忠、家光によって徳川幕藩体制の基礎が固められた。江戸時代の常識である鎖国、米本位制、参勤交代そして世襲と身分制はすべてこのとき定着した。

その後、5代將軍綱吉の世となり、元禄文化が花開いた。歌舞伎、浮世絵、俳諧といった江戸時代を象徴する芸術が生まれたのはこの時代である。

江戸時代の中頃、8代將軍吉宗の世をピークに、幕府の屋台骨は傾きはじめた。幕府財政を立て直すべく数々の規制の緩和を図ったのが田沼意次であった。平賀源内、杉田玄白といった鬼才、異才が活躍したのがこの時代である。

この反動であろう、保守層の意をうけた松平定信の寛政の改革と水野忠邦の天保の改革が断行された。振り子が規制緩和から規制強化へと大きく振れたのである。しかし、この二つの改革に挟まれた50年間に花開いたのが化政文化である。この時代を代表するのが北斎、広重、十返舎一九、曲亭馬琴などで、多士オ々である。

やがて、1853年ペリーの浦賀来航を機に幕末の動乱が始まり、ついに1868年徳川幕藩体制は終焉を迎えるのであった。

*編集事務所南風舎顧問

これは、江戸時代260余年の流れについての偽りのない記述の一つである。しかし、そうした記述をこえて江戸時代についての何らかの洞察やイメージを得ようとするとき、こうした記述に陰影あるいはメリハリのある絵を描かなければならない。そのための道具の一つとしてモデルというものがある。幸い我々の手元には、すでに本論文の「I. 組織としての江戸時代」でその妥当性が実証された組織の適応モデルがある。組織の適応モデルはこの作画という問題にどのように応えているのだろうか。

組織の適応過程

組織の適応モデルによれば、組織は、成長と衰退を繰り返しながら長期にわたって存続する。そして、組織は成長過程では革新局面を、衰退過程では保守局面を経験する。

革新局面とは、それがかわる環境を一新し、新しい常識の下新しい秩序の建設・確立に励み、組織の成長の促進を図る時期である。続く保守局面とは、これまでかかわってきた環境の中で、既に確立された秩序の維持、擁護に努め、組織の衰退をくい止めようとする時期である。そして、通常保守局面と革新局面の挟間に動乱期というのが潜在している。

組織が保守局面のそれも後期を迎えるころになると、組織のかかわる環境は組織の常識にいいよそぐわなくなり、互解がいつそう盛んに

形成され流布されるようになる。そのため、そうした互解から芽生えた「常識」と既存の常識とが並存するようになる。この期間は新しい常識を支持する人たちと既存の常識を守ろうとする人たちとが激しく対立するいわば動乱期である。そしてこの動乱期は新旧の常識の優劣が逆転する時点を境に、さらに動乱前期と動乱後期とに分けることができる(図5.1参照)。ちなみに、図5.1は前稿の図4.2 適応的組織の推移を透視したものである。

それに対応して、新生の常識を支持する人たちは、さらに動乱前期の先駆派と動乱後期の改革派とに分けることができる。同様に、既存の常識を守ろうとする人たちも、さらに動乱前期の守旧派と動乱後期の復古派とに分けることができる。

ここに至って、組織の適応に抗するいわゆる抵抗勢力には大別して二つあることがわかる。一つは守旧派と呼ばれる人たちで、現在の常識のもたらしている既得権益を守ろうとして現在の常識の変更に抵抗する保守局面後期の敵役(例えば幕末の佐幕派)である。したがって、正しくは“守現派”とでも呼ばれるべきなのだ。もう一つは復古派で、更新された常識のもと新時代にいながら、新しい常識になじめなかったりその実態に失望して、昔の古い常識を是として現常識の普及や定着に抵抗する人たちで、革新局面前期の敵役である(例えば、江戸時代初期の豊臣秀頼を擁立して大坂城に立てこもった武将たち)。

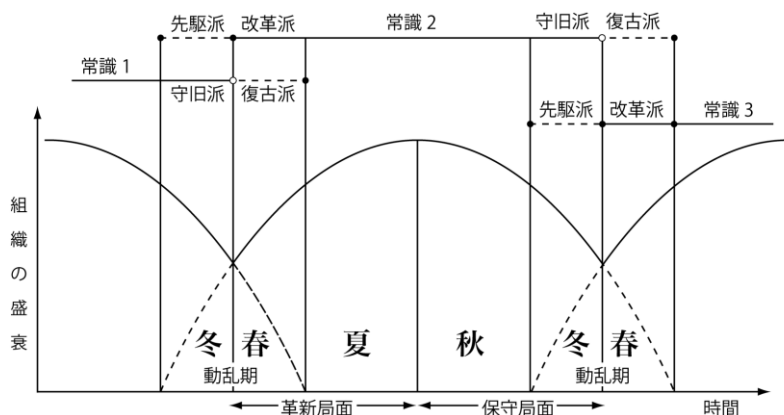


図5.1. 組織の春夏秋冬

それはともかく、組織の保守局面と新たな革新局面との挟間に今述べたような動乱期が潜在する。そのため、組織の盛衰サイクルは以下のような四つの局面から構成される。

I. 革新局面前期＝動乱期後期・・・春

II. 革新局面後期・・・・・・・・・・夏

III. 保守局面前期・・・・・・・・・・秋

IV. 保守局面後期＝動乱期前期・・・冬

そして、各局面を組織の春、夏、秋、冬としよう。

1. 春

組織の盛衰サイクルの第1の局面の春は、図5.1より明らかなように革新局面の前期で、同時に動乱期の後期でもある。

この時期、組織のかかわる環境と組織の常識が一新されて間もない。その環境と常識が適切であれば、組織はそれまでの低落傾向から一転して再び成長し始める。そのため、組織のこの成長をもたらした新しい常識は、多くの人たちによって徐々に信頼され、支持されるようになる。しかし、革新局面のはじめの頃はまだ昔の常識の方を良しとするいわゆる復古派の人たちが少なくなく、これが動乱の未だ治まらぬ革新局面前期の組織の様相である。

したがって、革新局面に入ったからといって油断は禁物だ。動乱にあまり手こずっていると、組織が成長軌道に乗り切れず失速してしまう危険が大きくなる。このため、組織の権力を握った改革派は復古派に抗して新しい常識を迅速に普及させ確固と定着させなければならない。

一般に、常識を共有するためのコミュニケーションが教育であるが、それが新しい常識のコミュニケーションとなると教育とはかく強引でエゲツないものとなりがちである。組織の春において、改革派はあらゆる権力を動員して復古派の力を物理的に殺ごうとするが、これは“見せしめ”を通した新しい常識の教育ともなっているのである。

また、この時期、これまでの常識が互解となり、これまでの互解が常識となる。これは組織カルチャーや気風の転換を意味しているの

はないか。すなわち、この局面では、復古派に支持・擁護されているサブカルチャー（これまでのカルチャー）が既に時代遅れのものとして冷遇され衰退し、改革派の支持するカルチャー（これまでのサブカルチャー）が勃興し新時代を象徴するものとして推奨されるようになるのである。

要するに、この局面では、組織の実権を握った改革派による物理的にも文化的にもかなり乱暴な権力行使がよく見られるが、これはすべからく復古派の抵抗を早急に排して、速やかに新秩序を建設せんがためなのである。

それでは、江戸時代の春はどうであったのか？徳川家康は、それまでの永い戦乱の世に終止符を打ち、江戸に幕府を開いた。当然のことながら徳川幕府は、乱の世から治の世への大転換が課せられた。その変革が大きければ大きいほど、それに対する抵抗も大きくなる。徳川幕府は、そうした抵抗にどのように対処したのだろうか。これが江戸時代初期の最も注視すべき点であろう。

本論文では、それについて、特に豊臣秀吉の血統や秀吉恩顧の武将たちの運命、朝廷に対する徳川家康、秀忠、家光の対応、それに長期政権の障害となりうる勢力の取り扱いなどをみてみる。そして最後にこの時期、文化がどのように変化していったかを検討する。

1.1 最後の戦争

関ヶ原の合戦の意味するもの

1600年の関ヶ原の合戦は「天下分け目のいくさ」と言われている。

たしかにこの戦いで家康の覇権は決定的となり、その結果3年後には家康は征夷大將軍となり、徳川幕府を開くことができた。家康がこの国の武力の頂点を極めたことは確かである。しかし、安定した永続する体制をめざす62歳の家康にとって、問題はあまりにも多く、残された時間は僅かであった。

織田信長、豊臣秀吉と比類のない覇者のあつけない最後を見てきた家康にとって、権力の持続は悲願であった。永続する徳川家の治世をい

かにして確かなものにするか、これ以降、その死までの13年間、家康は全知全能をしばらくすべての努力をこの一点を目指して傾注した。

そもそも関ヶ原の合戦は中世の長い戦国時代の総決算というには不十分な奇妙な戦争であった。秀吉の天下から徳川の時代へと大きな時代の転換のために、オール秀吉勢と徳川が対決したかという、そうではなかった。関ヶ原の合戦で東西に分かれたのは、たまたま西軍の主将が石田三成であったために、家康の巧みな誘導によって、本来なら秀吉側に属するはずが、心ならずも家康の側で戦った多くの武将たちがいた。加藤清正とか福島正則はその典型である。したがって、関ヶ原の合戦は、家康の巧妙な挑発と誘導によって敵味方に分かれた奇妙な戦いだったのである。

その意味で、関ヶ原の合戦は、家康の描いた構図によって、戦う前に大勢が決していたようなものであった。

このため、関ヶ原の合戦以後も、勢力地図は安定とはほど遠く、政権安定のための駆け引きは続いた。その最大の山場が大坂冬の陣、夏の陣であった。これこそ家康にとって戦国時代に幕を引く「最後の戦い」だった。

家康は、関ヶ原の合戦で勝利することによって、武家の頂点に立つことができたのだが、その時点でもっとも目障りだったのが、難攻不落の堅城と言われた大坂城とそこに籠もる秀吉の遺児秀頼の存在であった。しかし、秀頼は徳川幕府創設時にまだ11歳と幼く、母親淀君の庇護を必要としていた。

秀頼は父親秀吉と違って体軀も大きく、成長とともに堂々たる風格を備えてきた。家康の再三の要請に応じて秀頼が二条城で家康と初めて面会した時、秀頼は19歳、家康は70歳になっていた。成長した秀頼を実見した家康は改めてその危険性を認識した。秀吉を慕う武将はまだ全国に多数おり、特に西国の大名たちのほとんどが家康よりも秀吉に心を寄せていた。このため家康にとって秀頼の成長を座視することはきわめて危険なことだった。

しかし、理由もなく秀頼に対して戦端を開くことはできるものではない。大義名分が必要で

ある。そこに起こったのが、方広寺の鐘銘事件であった。

けんかのきっかけとして「言いがかり」という言葉があるが、史上これほどあからさまな言いがかりはめったにない。このため家康にとってこの事件ほど世の評価を下げ、後世に悪評を残した事件はない。

アメリカ大統領ブッシュがフセインの隠し持つ大量破壊兵器という情報を口実にイラクに侵攻したのも、虚報に基づく言いがかりであったが、これによってブッシュの信頼は地に落ちオバマと政権交代を余儀なくされたのは記憶に新しい。

家康にとっても、言いがかりとしか思えない口実によって戦争を起こせば信頼を失うのは容易に予想された。にもかかわらず家康はそれをあえて断行した。秀頼を葬ることはそれほど切実な問題だったのである。

豊臣家を滅ぼすために仕組まれた大坂の陣

事件のきっかけは方広寺の再建であった。これも家康の大坂勢に対する戦いの一環として行われたものである。かねてから、大坂城に秘匿された巨大な財宝を消費させる目的で、家康は淀君に、秀吉の供養のため、寺社の建立、修復を勧めてきたが、その最大のもの、京都方広寺の大仏殿が完成したため、慶長15年(1614)8月2日落慶法要を行うということになった。この日のために天台宗、真言宗、各500人、合計1,000人の僧侶が集められ、600石の餅がつかれ、3,000樽の酒が用意された。またこれを見物するために全国からおびたどしい群衆が京都へ集まっていた。

このときである。その鐘に刻まれた銘「国家安康」「君臣豊楽」という文言に言いがかりをつけた。すなわち「国家安康」は家康の字を二つにさいて呪う意味があり、「君臣豊楽」は豊臣を君として末永く楽しむと読めると主張したのである。こんなこじつけを本気で主張したのが幕府の儒官である林道春(羅山)であり、同調したのが御用学者や僧侶だった。

こうして落慶法要は延期されてしまった。突然の延期命令に大坂方はもちろん世間は騒ぎ

になった。

家康という人物はこのときまでは辛抱強い人、律儀な人と思われていた。「鳴かぬなら、鳴くまで待とう ほととぎす」と言われた「待ち」の政治家であった。しかし、73歳の家康には先がなかった。

この時点から、家康は、一身に悪名を背負い込んであえて挑発を繰り返し、戦いを挑んでいる。家康は將軍職について2年後にはその地位を息子の秀忠に譲り、大御所として、大所高所から政治を仕切ってきたが、大坂の陣は73歳の家康が自ら先陣に立って采配を振った。政權基盤の確立のための「汚れ仕事」を自ら処理する覚悟と考えられる。

気位が高く、勝ち気の淀君を挑発するのは、家康にとってはいともたやすいことであった。家康は大坂側に対し、呑めないことを承知で過酷な条件をつきつけた。それは、秀頼が江戸へ参勤するか、淀君が江戸へ出てくるか、もしくは大坂を退去して何処かへ国替えを承知するかというものであった。これは淀君には絶対に呑めるものではなかった。使者が何度も往復したが、家康は使者によって態度を変えてゆさぶりをかけた。家康のたび重なる挑発によって大坂勢はついに立ち上がった。家康にとっては待ちに待った最後の決戦であった。家康はただちに全国の大名に出陣を命じた。

もちろん大坂側も、秀吉恩顧の有力大名に味方を要請した。しかし、すでに徳川の覇権は確立しており、前田利長をはじめ、有力大名であえて大坂側に荷担する大名はついに現れなかった。それどころか、大坂からの使者を急いで追い返したうえ、秀頼からの手紙をそのまま封も切らずに家康にあてて送り届けて、家康への忠誠心を示そうとした大名さえいた。大坂の呼びかけに応えたのは、せいぜい真田幸村、長曾我部盛親、毛利勝永らであり、あとは大勢の浪人であった。関ヶ原の合戦とその後の西軍大名の改易によって世にあふれた浪人は、起死回生をねらって大坂城に続々と集まってきた。大坂城には大量の金銀が蓄えられていたので浪人にとってはまたとない稼ぎ場所だった。しかし、大勢の武士、浪人への手当、籠城のための食糧、

武器弾薬と戦いの準備を進めていくうちに、さしもの大坂城の金庫も底をついた。秀吉自慢の黄金の茶室が鋳つぶされたのもこの時であった。こうして大坂方は12万人ほどの陣容ができあがったが、それでも関東方の20万～30万に対してやっと約半分、それも統率のとれない寄せ集めの軍団であった。特に中心となる統率者がいなかったのが決定的な弱点であった。総大将は秀頼であったが、まだ22歳、実戦の経験はまったくない貴公子に大戦争の指揮ができるはずなかった。

こうして1614年10月大坂冬の陣が始まった。

この戦いも家康の描いた見取り図によって戦いの構図が決められていた。寄せ集めの軍団とはいえ、難攻不落の大坂城に立てこもってしまえば、容易には決着はつかなかった。そこで攻めあぐねた家康は休戦を提案した。家康の出した休戦の条件は、外濠を埋めること、淀君を人質として江戸へ送ること、浪人をすべて追放すること、などであった。一方的に大坂方の戦力をつぶしてしまおうという目的があからさまであった。なかなか合意しない大坂方に対し、昼夜を問わず大砲を撃ち込み淀君を初め女人たちを恐怖のどん底に叩き込んだ。当時の城はあくまでも戦国時代の弓、槍、飛び道具もせいぜい種子島ていどを想定したものであったが、家康はこのとき、西欧諸国から最新の大砲を入手していたから、射程も長く、破壊力もあった。そのため大坂方はやむなく、濠を埋めるなど明らかに無理難題と見える条件を呑んで休戦に合意した。休戦の誓紙をかわすと徳川勢は間髪を入れず大量の人員を動員して濠を埋めていった。しかも外濠の約束だったにも関わらず二の丸、三の丸も埋めてしまい、ほとんど裸城にしてしまった。難攻不落と言われた大坂城も濠を埋められてしまえば、難攻でも不落でもない。

騙されたと知った大坂方が怒って濠を掘り返し始めると、家康は約束違反を言い立て、再度軍を起こした。冬の陣の休戦後まだ半年しかたっていないかった。家康は休戦と偽って、堀を埋め、裸城にしたうえで、さらに挑発を繰り返して再度戦端を開いた。

こうして、翌1915年5月大坂夏の陣が始まっ

た。冬の陣が籠城戦で、決着がつかなかったのに対し、濠を失った大坂方は家康の得意とする野戦にうって出るしかなかった。家康は自信満々で、諸兵に三日分の兵糧で十分と指示したほどであった。

この戦いは、浪人たちにとっても最後の決戦であったから、劣勢にもかかわらず大坂方の戦意は高く、徳川にとっては思わぬ苦戦をしいられ、日本戦史上最大の激戦といわれる戦いが展開された。双方が出した犠牲者の数はそれまでの史上最大と言われたほどであった。

特に真田幸村、塙団右衛門（はなわ だんえもん）、後藤又兵衛らの戦いぶりは目覚ましいものがあつた。中でも真田幸村は家康の本陣にせめかかり、馬印も維持できないくらい陣容をつき崩し、家康もあわやというまで追い込まれた。

しかし、一時は大坂方に有利でも衆寡敵せず、最後には徳川方の勝利は揺るがなかった。大坂方は指揮系統がなく、徳川方は数において圧倒的に勝っていたのである。ついに、秀頼、淀君らを自刃に追い込んだ。このとき秀頼23歳、淀君49歳といわれている。こうして3日ほどの野戦で大坂夏の陣は終結した。家康にとって秀頼、淀君を葬ることは、まるで赤子の手をひねるように簡単なことだった。これも後世家康の評価を落とす原因になった。

しかし、家康はすべての悪評を引き受けても、徳川にとって将来の禍根を断つことに迷いはなかった。

家康は秀頼の命を絶つだけで満足したわけではない、秀吉の血統を絶つことに強い執念を燃やしていた。

秀頼には正室として秀忠の子、つまり家康の孫にあたる千姫を送り込んでいたが、千姫には子はなかった。だが、秀頼が側室に産ませた男女各1人の子がいた。家康は戦後この子どもたちの搜索を命じた。ついに伏見に潜伏していた二人の隠れ家をつきとめて捕らえ、9歳の男児国松は、京の街なかを引き回したあげく六条河原に引き出して斬首し、女子は鎌倉の寺に尼として送りこんだ。国松の斬首は名のある者に対する礼儀をかなぐり捨てて、穢多（えた）と言

われてさげすまれていた身分の者に切り捨てさせた。これも世の非難をあびたが、家康にためらいはなかった。こうして豊臣家の血統を根絶した。

千姫は秀忠の娘つまり家康の孫であるが、秀吉との約束によって秀頼に嫁いでいた。夏の陣の最後の局面で天守を焼く火炎の中から千姫を救出して家康に送りどけ、休戦の糸口をつかもうと打診が行われたが、かわいい孫娘を見ても家康は攻撃の手をゆるめることはなかった。

家康が豊臣家を追いつめてゆくプロセスを見てゆくと、「目的のためには手段を選ばず」という言葉どおり、武士にとって大切とされていた「信」も「義」も投げうって、なんのためらいもなく進められたことがわかる。安定した徳川の世を作り上げるために、これがいかに重要か家康の執念ともいえるべき強い意志を感じさせられる。

家康はこうして大坂の陣を終えると、元和（げんな）と改元し、さらに、これで武器を収め、以後戦争は行わないという意味の「元和偃武（げんなえんぶ）」を宣言する（1615年）。徳川のもとでの平和宣言である。事実、このあと250年にわたって戦争のない平和な時代が続いたのである。

家康はここに自らの生涯の最後の仕事をなすとげ、翌年（1616年）4月、75歳の生涯を閉じた。政権安定のためには、まだ多くの仕事が残されていたが、それらは2代秀忠、3代家光へと引き継がれた。

1.2 改易と浪人の激増

改易断行

秀吉が死の床にあつたとき、その地位をつぐのは嫡子秀頼、それを守るのは徳川家康、前田利家、毛利輝元、上杉景勝、宇喜田秀家の五大老、その下に浅野長政、石田三成、増田長盛、長束正家、前田玄以の五奉行、さらに全国300余の大名がそれに従う。少なくとも秀吉は権力の構造をそのように構想し、またその安定を強く願っていた。このため五大老、五奉行の10人にはこれを明記した遺言を与え、さらに血判をついた起請文の提出を求めるほどの念のいれよ

うであった。

家康以外の大名はこれに異存はなかった。しかし、家康のみがこの時点で次の覇者を夢見ていた。家康は秀吉の死後ただちに遺言を破って、これ見よがしの挑発行為に出た。これは、この時から家康が天下取りの宣戦を布告したことを意味している。

その遺言とは秀吉が固く禁じた大名同士の婚姻、養子縁組である。家康は覇権を握るためにこの時点で他の大名全てを敵に回して戦っても勝ち目があるとは思っていなかった。家康の作戦は味方をふやし、敵を分断し、各個に撃破するというものであった。

そこで目を付けたのが、秀吉恩顧の武将たちの中の吏僚派と武闘派の間に反目があるという事実であった。すでに朝鮮進攻（文禄の役）（1592～）の時点で彼らの反目はあからさまになっていた。それは戦地で戦う積極派の加藤清正や福島正則、浅野幸長らと、内治を重視する石田三成、小西行長らとの対立として表面化していた。

秀吉の死後、その対立は決定的になった。家康の作戦はそこに着目し注意深くその離反を拡大し、武闘派を味方に取り込んでゆくというものであった。そのために有力な大名との婚姻、養子縁組を精力的に推進した。家康にとって関ヶ原の合戦の意味するものは、秀吉恩顧の大名を分断し、吏僚派を殲滅することだった。しかもその戦いを主として秀吉恩顧の武闘派を主戦力として戦わせるという実に巧妙な構想であった。このため家康は、將軍秀忠に譜代の主力をつけ、わざわざ中山道へ迂回させ、結果として関ヶ原に遅参し、戦闘に加わることなく、家康にとっては井伊直政以外の主要な譜代の武力は温存されたのであった。

関ヶ原の合戦は、天下分け目の戦いと言われているが、実態は秀吉恩顧の勢力を二分し、その半分を殲滅する戦さだったのである。こうした構図は家康の慎重な根回し、情報戦によって巧妙に組み立てられた。

こうしてみると、関ヶ原の合戦は家康の天下取りの第一段階にすぎないことがますます明らかになる。

第二段階は、この戦いで西軍に属し、あるいは西軍に心を寄せていた大名たちの改易つまり取りつぶしであった。石田三成、小西行長ら西軍大名合計90家を取りつぶし、さらに毛利輝元、上杉景勝らを減封処分とし、合計600万石以上が没収された。これは、当時の全国の石高1,850万石の三分の一に達する膨大な量であった。

一口に改易といっても、その実態は悲惨なものであった。大名が改易になるということはその家臣数百人の知行取りの侍をはじめ、直参の給人、陪臣の中間、小者まで含めると数千人の侍とその家族が一気に城を明け渡して浪人となるのである。こうして浮いた領地を家康は徳川譜代のほか、東軍に味方した外様大名たちに驚くほど気前よく分配した。ケチと云われてきた家康が、はじめて見せた大盤ふるまいであった。

もちろん、これも周到な計算のもとに行われたことは云うまでもない。

この大規模な改易・転封によって秀吉恩顧の大名の半分は領国を失って消滅し、残りの半分は大盤ふるまいによって家康に抱き込まれ、もはや公然と家康に叛旗を翻す者などいなくなった。この改易・転封がいかに大規模で効果の大きなものであったかはかりしれないものがある。こうして家康に取り込まれた大名のうち典型的な事例として、福島正則のケースを見てみよう。

なお、第三段階の大坂の陣で前時代の勢力つまり豊臣家を葬ったことは前節に見た通りである。

福島正則の得意と無念

この一連の作戦を通して、家康がもっとも気を使い配慮を怠らなかったのが、福島正則という武将であった。正則は秀吉の下で「賤ヶ岳（しずがたけ）の7本槍」といわれた一番槍、一番首の武功をはじめ数々のめざましい武功をたて、槍一本で大名にまでのし上がった一本気で勇気あふれる典型的な戦国武将であった。

秀吉の死後も秀吉に対する尊崇の念は少しも変わらない。

このとき、秀吉に心酔している直情径行の荒武者、正則を味方に取り込めるか否かは家康にとって天下取りの成否を左右する最重要課題だった。また、正則は実際、重要な局面で決定的な役割を何度も演じている。いずれのケースを見ても、真っ正直で短慮な性格を家康に握られ、上手に躍らされた感が否めない。

第一の場面が小山（おやま）の軍議である。

会津の上杉景勝が石田三成に呼応して反家康の旗色を鮮明にすると、家康は大軍を擁して上杉討伐軍をおこした。かねてから三成と反目していた正則は真っ先に家康に味方して北上した。しかし、会津を前にして、下野国小山（おやま）で、石田三成を中心とする西軍決起の情報が入った。そこで開かれたのが小山の軍議である。家康の陣営には秀吉恩顧の武将も多数加わっていた。彼らは妻子を大坂に残していた。このまま家康に味方するか西へ帰るか、心が乱れるところであった。

この時、家康は集まった武将たちを前にして一世一代の大芝居を打った。

「おぬしらは妻子を大坂に残している。家康に味方してほしいとは云いにくい。おぬしが大坂へ帰っても恨むつもりはない。」

場内は一瞬沈黙が支配した。皆が注目したのは秀吉子飼いナンバーワンの福島正則の動向であった。やがて正則が口火をきった。

「このたびの反乱は三成個人の計である。自分は妻子の情に引かれて武士の道を踏み間違えるような事はしない。家康のため身命をなげうってお味方する決心でござる。」

この言葉につられて、他の大名たちも次々と家康に味方する決意を申し出た。正則の性格を巧みにつかんだ家康のみごとな演出であった。正則のひと言で東軍の陣容が出来上がったのである。

正則登場の第二幕は関ヶ原の合戦であった。正則はこの戦いに6,000人という東軍最大の軍勢を引きつけて参戦し、東軍の中心となって大活躍し東軍を勝利に導いた。この活躍によって正則の存在が一段と大きくなったことは言うまでもない。

第三の場面は、この軍功に対する恩賞である。

西軍に荷担した大名の領地を取り上げ、東軍に加わった大名に大盤ふるまいをしたことは上述の通りであるが、正則はこれまでの尾張清須24万石から、25万石が加増され、安芸、備後2カ国49万石を与えられ、大大名として広島城に乗り込んだ。この時がまさに正則の絶頂期であった。

この大恩賞は、関ヶ原の合戦での活躍のみならず、小山の軍議での衆議を導いた功績が加味されていることは言うまでもない。しかし、正則の場合、さらに重要なことは、その後の秀頼との戦いに備えたものであることを見逃してはならない。正則はこれによって秀吉から受けた恩義にまして家康からも大きな恩義を受けてしまったのである。このためこれ以降、正則の行動はいちじるしく生彩を欠いたものとなった。

第四の場面では、なんともふがいない姿をさらすことになる。家康は幕府を開くと、直ちに江戸城を始め、彦根城、駿府城、丹波篠山城など徳川の主要な城の大増築工事に着手した。これには徳川の守りを堅くするという目的ももちろんあるが、同時に外様大名たちの力を消耗させる狙いも多分にあった。

各大名はこのために巨大な労役を供出させられた。

1604年には、江戸城の修築のために各大名に石材と木材の運搬を命じたが、正則はこれに応じて100艘もの石材運搬用の船の建造に着手した。

その後も城普請が続き、さらに家康の第9子で当時まだ11歳の義直のために尾張名古屋城の修築が命じられた。1日の休みもなくうち続く労役に各大名の財政負担は大変なものであった。こうした労役に音を上げた正則は、つい愚痴を口にした。「江戸城や駿府城は天下の城だからしかたがないとしても、名古屋城は末の息子の城じゃないか。こんなものにまでわしらが動員されるのは筋がとおらない」

これを聞いた加藤清正は、笑いながら、「不満があるなら今すぐ国へ帰って謀叛の準備をしたらどうだ。それが出来ないなら、だまって城普請に精を出せ。」といさめた。

その加藤清正は巨大な石材を5千人の人力に引かせて、自身はその石の上ののって大声で木遣りを歌って景気をつけていた。

ここでは、福島正則も加藤清正も昔の荒武者の面影はなく、家康の歓心を買うためになんと情けない姿をさらけ出している。

第五の場面は、大坂の陣である。家康は全国の大名に出陣を命じたが、正則には江戸城の留守居役を命じた。恩義のある秀頼と戦ういくさに正則は参戦できないだろうという家康の思いやりともとれるが、むしろ、正則を信用できないという不信感のほうが強かったのではないだろうか。

正則は、戦争を避けるため、何度も秀頼と淀殿に手紙を出して、江戸に出て家康に恭順の意を示すように諭したが、効き目はなかった。

大坂で激戦が繰り広げられている間、かつての戦場の荒武者は江戸で手をこまねいていたのである。

第六の場面は、悲惨である。家康にとっても正則はすでに用済みであったが、さすがに関ヶ原の功績を考えると、これ以上露骨に排除することは出来なかった。しかし、2代将軍秀忠となると、すでに非情である。広島地方を襲った台風のため、この地域一帯が大きな被害を蒙った。広島城も櫓や石垣の一部が崩れた。このため、正則は石垣修復の許可を願い出たのち、修復をはかった。しかし、願いは受理されておらず、無断修築の罪で改易となった。

ほんの些細な瑕疵（かし）をとがめられて、49万石を没収されたのである。

幕府にとって、正則はすでに無用の存在となっていた。

徳川幕府創設期の秀吉恩顧の武将に対する扱いの典型的な事例がこの福島正則だったといえよう。

加藤清正は、その息子の代になって普段の行動を理由に改易されている。

改易・転封の嵐と浪人の激増

関ヶ原の合戦の戦後処理としての改易で合計600万石の所領が没収されたが、その後もいろいろな理由で改易が断行された。

改易の理由としてもっとも多かったのが「末期養子（まつごようし）の禁」にふれたものであった。

この時代、世継ぎのない者は原則として御家断絶とされたが、養子は認められていた。しかし、大名が危篤にさいしてから急に養子を届け出ても認められなかった。本人の意志が確認できないという理由であり、これが「末期養子の禁」である。しかし、当の大名にとって、子どもがないため、早手回しに養子をとって跡継ぎとしてしまうと、そのあとで子どもができると面倒なことになる。そこで、できるだけ養子という手段は後にしたいのが人情である。かといって、家主が重い病に伏してから養子は許されない。これが子のない大名にとっては深刻な悩みの種であった。

事実、寿命の短かかった当時、この制度のために改易になった大名が非常に多かった。これは外様のみならず身内の譜代大名に対しても斟酌することなく適用された。

大名が側室を設ける理由の一端はここにあった。

このほか、一国一城令違反などの法令違反などいろいろな理由をつけて改易が行われた。

改易はこの当時、権力行使の極刑ともいうべき手段であったが、これが、反徳川勢力のみならず身内にたいしても適用されたのである。特に二代将軍秀忠、三代将軍家光の時代には、積極的に改易と転封という手段が使われたが、それは、大坂や京都の周辺をはじめ各地の重要拠点に徳川一家、譜代を配置するためだったのである。こうして、家光の代までに徳川による全国支配のための大名配置がほぼ完了した。

こうした強大な権力をふるって大名を自在に再配置した政策を、新井白石は、「大名を鉢植えにする」と評した。徳川15代を通じて、この初期三代は、もっとも強引な権力の行使が行われた時代であった。

徳川三代を通じてこうした平時に行われた改易も、関ヶ原の合戦の戦後処理に劣らぬ大規模なものとなり、このため大量の浪人が世の中に放出された。彼らが職を求めて建設途上の江戸へ集まってくるのは自然の成り行きであった。

当時の江戸には40万人の浪人があふれていたと言われている。運良く武家に勤め口を見つけた者はよかったが、苦勞して商売を始めるものもあり、なんといっても建設関係の職につくものが多かった。

幸いなことに当時の江戸では江戸城の増築をはじめ、旗本、御家人たちの武家屋敷、全国の大名たちの江戸屋敷、それに道路、橋、上下水道などインフラの建設ラッシュであった。その上、大規模な火災も相次いだ。日銭を稼ぐ方法はいくらでもあった。当時の江戸は、浪人をはじめ、農村からのあぶれ者など圧倒的に多い都市であった。そこには、必然的にばくち、けんかなど都市固有の悪が発生し、はびこった。

異様に長い刀、長ぎせる、長いもみあげなどアンバランスな風俗を誇示する「かぶき者」が都市にあふれた。さらにそれがファッションとして、堅気の若者たちにも広がり、かぶきの風俗が一世を風靡した。第三代将軍家光も少年時代にかぶき者の風俗にかぶれて周りの者を困らせたと言われている。

彼らの間には勢力争いのケンカも絶えなかったが、次第に、町人のかぶき者と武家のかぶき者が、町奴、旗本奴、として対立していった。

幡随院長兵衛とかぶき者

江戸の町では肩で風を切って暴力ぎたを繰返しては町人に迷惑をかける旗本奴と呼ばれるかぶき者たちがいた。かねてからその横暴ぶりを見かねていた町奴の親分、幡随院長兵衛（ばんずいいん ちょうべえ）は自慢の腕っ節にものをいわせて、彼らをこらしめた。

これを聞きつけた旗本奴の頭、水野十郎左衛門は、酒宴にかこつけて長兵衛を自分の屋敷に呼びだした。長兵衛の子分達はこれははかりごとでにちがいないと制止するが、長兵衛はここで誘いをことわったのでは男がすたとばかりに单身水野の屋敷へ乗り込んでいった。屋敷では酒宴のはてに長兵衛は風呂を勧められ、丸腰になったところへ十郎左衛門の手下どもがいっせいに切り掛かり、ついに彼は殺されてしまった。

そのころ、幡随院長兵衛の家には長兵衛があらかじめ手配してあった棺桶が届けられた。すべて覚悟の行動だったことがここで示唆されている。

芝居、映画の中で描かれたこういった幡随院長兵衛のイメージは、侍への反感をバックにした、庶民のヒーローとして成長し定着していった。侍にこびず、弱者を守り、しかも義理人情にあつい、いざとなったら自分の一身をなげうってでも筋は通す。こんなところが江戸っ子の人気の理由だろう。

この幡随院長兵衛の見せ場はもちろん芝居上のフィクションであろうが、あくまでも実在の人物と事件をモデルにしたものであり、幡随院長兵衛の墓は今も台東区東上野の源空寺にある。

現実の幡随院長兵衛はいわゆる口入れ稼業、現代の人材派遣業、労働者の仕事を斡旋する仕事であった。その当時、浪人はもちろん、農村からあぶれて都市に流れ込むものは多かったが、縁者のないものたちの身元を引き受け、宿を提供し、仕事を斡旋する口入れ稼業は必然的に社会から求められていた。膨張を続ける江戸では、建設業はもちろんだが、参勤交代で江戸に屋敷を構える大名たちも各種の奉公人を求めていた。参勤交代の大名行列でさえ、奴をはじめ大勢のパートタイマーによって支えられていたのであった。

自然に口入れ屋は、子分たちと強い絆で結ばれ、親分は方々に顔をきかせ、中には幡随院長兵衛のように町奴の親分として存在感を示すものも出てきた。

一方、武士の方も戦争がなくなって武士の本来の職場が失われ、戦争を知らない武士の子供たちが目的を失ってぐれる。そうした若者が町にあふれれば、社会の不安定要因になることはさけられない。

しかし、幕府はこうしたかぶき者が風紀をみだすとして徹底的に取り締まった。実在の水野十郎左衛門もこの事件の数年後には切腹を申し渡されている。

こうした風潮を生みだした原因は浪人の激増であった。浪人は戦国時代であればいくさが終

れば、農民にもどるものがほとんどであった。しかし秀吉の時代に兵農分離が進み、江戸時代に入って士農工商と身分が固定してくると、帰る田舎を失った侍は改易などによって主家を失うと浪人として都市へ流れ込む以外に生きるすべがなかった。戦争さえあれば、チャンスもあったが、元和偃武以来戦争がなくなってしまったので、完全に失業してしまうのである。

こうして見てくると浪人を生む背景として、江戸時代に入って身分が固定ししかも戦争がなくなったことが基本的な条件として考えられる。浪人激増は時代が生みだした構造的な産物だったのである。

浪人の激増と由比正雪の乱

三代将軍徳川家光が、有能な幕閣の力をかりて諸制度を完備し、江戸幕府の基礎を固めたものの、48歳で没すると、まだ11歳の家綱が第四代将軍として残された。

1651年、幕府を開いてほぼ50年たった時のことであった。

このころ、打ち続く戦乱の世がおわり、全国から集まってきた大量の浪人が江戸の町にあふれ、町は不穏な空気に包まれていた。

そんなときであった。江戸、大坂、駿府で同時に浪人たちが決起する大掛かりな同時多発テロの計画が発覚した。

大風の夜に小石川の幕府の火薬庫の番人河原十郎兵衛が火薬庫に火をつけ、その爆発と同時に江戸各所に放火し、驚いて登城する老中らを鉄砲で打ち取り、その騒ぎに乗じて江戸城を乗っ取る。その総指揮には当時御茶ノ水で道場を開いていた槍の名人、丸橋忠弥があたる。

同時に、大坂では、金井半兵衛が浪人をあおって反乱をおこし、さらに別の一隊が、駿府城をのっとり、久能山の家康の埋蔵金を奪う。これには、全体の首謀者、由比正雪（ゆい しょうせつ）自身があたる。2,3百人で久能山をおさえれば、千人、万人がかかってきても防ぐことができる、そのうち全国の浪人があちこちで決起するというシナリオであった。

手始めとして、正雪が11人の同志とともに駿府へと向かった。しかし、このときすでに計画

は幕府にもれており、幕府の対応は早かった。

駿府の正雪の宿は包囲され、観念した正雪らは自害した。

大坂へ向かった金井半兵衛も天王寺で自殺。

同時に、江戸でも忠弥をはじめ、一味、一族郎党が次々に捕縛されていった。

逮捕の範囲は妻、親、子、親類縁者にまで及び、つぎつぎに磔（はりつけ）、斬罪（ざんざい）、獄門（ごくもん）と容赦なく極刑に処していった。

こんな大胆な反乱を企画扇動した由比正雪とはいったいどんな男だったのか。正雪は今の静岡県由比の紺屋の息子といわれており、江戸で塾を開いて軍学を教えていたが、総髪（そうかみ）の異様な風ぼうとともに人を引きつけるカリスマ性があり、浪人など門人3千人と豪語していた。

このような大規模な反乱が起こった理由は、主を失った浪人が巷にあふれ、不満がうっ積していたためである。

家康、秀忠、家光の時代、関ヶ原の合戦や末期養子の禁による大規模な改易により、大量の浪人がセーフティネットのないまま社会に放出された。その数40万人と推定されている。戦争さえあれば、浪人も働き口がある。事実、大坂の陣では、全国から浪人が集まり大活躍したが、戦争がなくなってしまうと、浪人の働き場所はまったくなくなってしまった。

しかも、幕府は寺院や武家で浪人を置くことを禁じた。

これでは、社会不安は増すばかりである。

幕府も対策に苦慮したらしい。結局この事件を境に、末期養子の禁をゆるめたり、改易をほとんどやめてしまったり、力で押さえ込む武断政治から次第に文治政治へと政策が大きく変わっていった。この時期、幕閣の集団指導体制がうまく機能しており、柔軟な判断ができた。由比正雪の乱は江戸時代の前期の大きな節目となる事件であった。

【参考文献】

- 大石慎三郎（1977）『江戸時代』中公新書
岡本良一（1964）『大坂冬の陣夏の陣』筑摩書房

- 岡本良一 (1970) 『大坂城』 岩波新書
小和田哲男 (1985) 『豊臣秀吉』 中公新書
小和田哲男 (1999) 『徳川秀忠』 PHP 新書
北島正元 (1958) 『江戸時代』 岩波新書
北島正元 (1963) 『徳川家康』 中公新書
高橋富雄 (1987) 『征夷大將軍』 中公新書
辻達也 (1974) 『江戸開府』 日本の歴史13 中央公論
新社
遠山繁彦 (1990) 「江戸の潜在的反体制分子一幡随院
長兵衛」『歴史読本臨時増刊・大江戸悪人伝』 所収
二木謙一 (1982) 『関ヶ原合戦』 中公新書
原田伴彦 (1983) 『江戸時代の歴史』 三一書房
福尾猛市郎・藤本篤 (1999) 『福島正則』 中公新書
藤野 保 (1965) 『徳川幕閣』 中公新書
藤野 保 (1978) 「徳川幕府の大名統制策」『歴史読
本』 所収 (53年4月号新人物往来社)